

## 信徒たちの中で起こっている復活

マルコによる福音書16:1～8 / 李正雨

皆様、映画が好きですか。ある時、特別な結末をつける映画が流行っていたことがあります。一つは結末をつけない形であり、もう一つは二つ以上の結末をつける形でした。結末をつけない映画、複数の結末を持っている映画が流行っていたのです。最初の形は、結末の部分を観客の想像や判断に任せることでした。「皆さんならどうしますか」または「この映画の結末はどのようになりますか」という形であったため、観客は自分たちが主人公とか監督になり、結末をつけることができました。2番目の形は、結末があるため、最初の形のように観客の想像を必要としませんでした。それでも様々な結末で観客に満足を与えました。両方とも特別な結末を持っているためなのか、最近もこのような映画やアニメをしばしば見るがあります。

さて、面白いことですが、福音書でもこのような形の結末があります。今日の福音書がこの二つの形の結末を持っている福音書だと思います。今日の福音書は、マルコによる福音書16章1～8節までの言葉です。そして、私たちが持っている聖書には、9～20節までに結び1、結び2と書かれています。結び1、結び2というのは、結末が違う他の聖書写本があったということです。そして結びが書かれていない写本もありました。つまり、今日の福音書だけ書かれていた写本もあったということです。韓国語聖書には、9～20節まで括弧がつけられています。そして私は、この括弧の部分が後代に添付された可能性が高いと学びました。

皆様もこの結びの部分が気になっているでしょう。なぜマルコによる福音書の著者は、自分の福音書の結びの形をこのように多様な形にしておいたのでしょうか。このような結びについて保守的な学界では、当時には結びが要らなかったからだと言います。つまり、イエスさまの復活と復活後の活動を経験した人々や彼らの経験を聞いた人々がいたため、福音書の結末は文ではなく、口を通して伝えられてきたということです。しかし、時間が経ち、もはや言い伝えが可能にならないと判断した後代のクリスチャンは、言い伝えを文書にして、今日の福音書の後ろに添付したそうです。そして言い伝えがいろいろあったので、代表的な結び1と結び2が添付されたと言われています。私もこのような主張が合理的だと思います。

ところが、この主張に先立って、とんでもない考えを一度やってみました。果たして復活の結びが必要だったのか、著者が結末を書いていなかった意図があるのではないかという考えです。私は復活というものは、単に言い伝えや文章に限られてはならないと思います。他の人の経験や目撃に終わってもいけません。復活は信仰を通して自分の生活の場に入って来るべきものであり、自分の口を通して告白しなければならぬものです。信仰の人のそれぞれの生活の中で復活の喜びを味わうべきだということです。そうしないと、私たちは死という大きな壁を越えることができません。死は私たちのすべてのこと、私たちの肉と精神と霊までも飲み込んでしまうのです。

1ヶ月前のことです。3月4日、私の父が神さまに召されました。亡くなる前に受けた手術の結果が悪くなかったため、私は父が回復するだろうと思いました。ところが、死という悲報に接しました。そして私の頭は複雑になりました。すべてのことを神さまの御心に任せなければならないと思いました。感情は頭とは全然違いました。父が神の国に居るということを知っては分かっていましたが、心に受け入れることは難しかったのです。父が亡くなってから何日間は、ぼんやりして過ごしました。今もどう葬式を行ったか、よく覚えていません。それほど、死の力というものはものすごかったです。私の考えでは、イエスさまの弟子たちもそうだったようです。自分の先生の死を経験した12人の弟子たちも、何もする気持ちがなかったと思います。

今日の福音書には、イエスさまが亡くなられた後に起こったことが記録されています。何が起こったのか調べましょう。1～2節の言葉です。

「安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。」

イエスさまが亡くなられた後の3日目、三人がイエスさまのお墓に行きました。イエスさまの遺体に香料を塗るためでした。ところで、この三人の中にイエスさまの12人の弟子たちはいませんでした。一般的に遺体に香料を塗ることは女性たちがしたとはいえ、ヨハネによる福音書19章には、ニコデモがイエスさまの遺体に香料を塗り、亜麻布で包んだと書かれています。今日の福音書の三人の婦人は、ニコデモがやったことを知らなかったので、安息日が過ぎて香料を持ち、イエスさまのお墓に行ったのでしょう。さらに、ピラトにイエスさまの遺体を渡してくれるように要求した人も、12人の弟子ではなく、アリマタヤ出身のヨセフでした。イエスさまの死の後、12人の弟子たちは、葬儀の手續きにかかったことは書いてありません。

彼らは何をしていたのでしょうか。怖くて逃げていたのでしょうか、それとも、イエスさまについての恨み、つまり、自分たちが願っている通りにしてくださらなかったということで、葬式に取りかからなかったのでしょうか。恐れもあり、恨みもあったかもしれませんが、私は、死というものが与えてくれる絶望が弟子たちの心を支配したからだと思います。他の福音書に書かれているイエスさまの死後の弟子たちの状況を見ると、弟子たちは、自分の人生を諦めたように見えます。彼らはエルサレムから離れ、みんながバラバラになっていました。一部の弟子たちは隠れていて、一部の弟子たちは、元の自分の職場に戻っていました。彼らがお金のために自分の職場に戻ったわけではないでしょう。何をすべきかが分からなかったのではないのでしょうか。だから、自分たちが長い時間働いたところ、自分の職場に戻っていたのです。イエスさまと出会う前の人々に戻ったのです。イエスさまの葬儀の手續きに12人の弟子たちが関わっていなかった理由、それは、死が与える絶望が弟子たちを飲み込んだからだだと思います。

死の力はイエスさまの弟子たちを支配しました。イエスさまはご自分の死の前に、何度も自分が復活することを言われました。しかし、イエスさまの死の前で復活を覚えている人は、一人もいませんでした。12人の弟子たちだけでなく、今日の福音書に出てくる三人の婦人たちも同じでした。三人の婦人たちも、イエスさまの復活の知らせを聞きましたが、恐れるだけでした。今日の福音書では、天使と思わせる若者がイエスさまのお墓に訪れた婦人たちと出会います。若者は彼女たちに、イエスさまが復活なさったことを教えてくれます(6節)。そして、大事な言葉を伝えます。7節の言葉です。

「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」

「かねて言われたとおりに」、イエスさまは復活なさいました。そして弟子たちをガリラヤで待つておられることを告げなさいと言いました。しかし、三人の婦人たち震え上がり、正気を失っていて、だれにも何も言いませんでした。添付された結び2には、婦人たちが復活の知らせを弟子たちに手短かに伝えたと書かれています。また、添付された結び1には、弟子たちがイエスさまの復活を信じていなかったと重ねて書かれています。それほど、死の力はものすごかったのです。死から復活するということができなかったのです。しかし、イエスさまは復活なさいました。そして言われたとおりに、ガリラヤで弟子たちと出会って下さいました。その後、弟子たちがどうなりましたか。彼らは変わりました。バラバラになっていた彼らは、改めて一緒になりました。自分の職場に戻っていた弟子たちは、再び網を捨てて、イエスさまに従いました。隠れていた人々は外に出て、絶望の中にいた人々は、新たな希望を持つことができました。死の力がものすごかったほど、復活の力は、もっと強かったのです。そして、彼らはイエスさまのすべての言葉を理解することができ、それ以降は死を恐れなくなりました。

キリスト教の信仰において復活は信仰の基になる大切なものです。復活は、単に文章や言葉で伝わることに終わってはなりません。復活は、私たちの生活の中で起こらなければならないことであり、私たちの口を通して告白しなければならないことです。だから私は、最初にはマルコによる福音書の結末が書かれていなかったのではないかと思ったのです。復活は、私たちの信者たちの中から、続けて起こっているからです。イエスさまの12人の弟子たちにおいても、その弟子たちの弟子たちにおいても、そして数千年の後の私たちにおいても、イエスさまの復活は続けて起こっています。そして、イエスさまの約束どおりに復活を信じる者は皆、復活するのです。もはや死は、私たちを支配することができなくなります。このことを信じる信仰が私たちを恐れと絶望から救ってくださいますように。アーメン